

OPのある社会

「信頼できる情報社会」を目指して

2026年6月

Originator Profile 技術研究組合

Originator Profile



<https://originator-profile.org/>

OPのある社会 目次

1. 「信頼できる情報社会」を目指して
2. OPによって実現できること
3. 太鼓判は、届ける場所にも
4. OPは受信者の健全な判断を支える
5. OPエコシステムの広がり和社会への貢献

6. OPの適用領域

1. AIとOPの連携
2. メール/SMS/チャット/広告とOP
3. SNSとOP
4. ネットメディアとOP

7. ユースケース

1. 第三者による発信者確認
2. 行政発の情報
3. 公的機関のサイトの真正性
4. フィッシング詐欺対策
5. 選挙に関する情報の真正性

8. OPによる信頼のエコシステム浸透の道のり

9. 信頼のエコシステム浸透に向けたOP-CIPのアクション

Appendix

- a. OPとその関連技術

「信頼できる情報社会」を目指して



表情、声色、服装、雰囲気…

私たちは様々な情報と経験から直観的に
相手を信頼して良いか判断します。

それでも不安なときは、誰かに聞いたり、
調べたりするかもしれません。

あるいは、「今すぐには判断しない」ことも
あるでしょう。

——では、インターネットでは？ ——

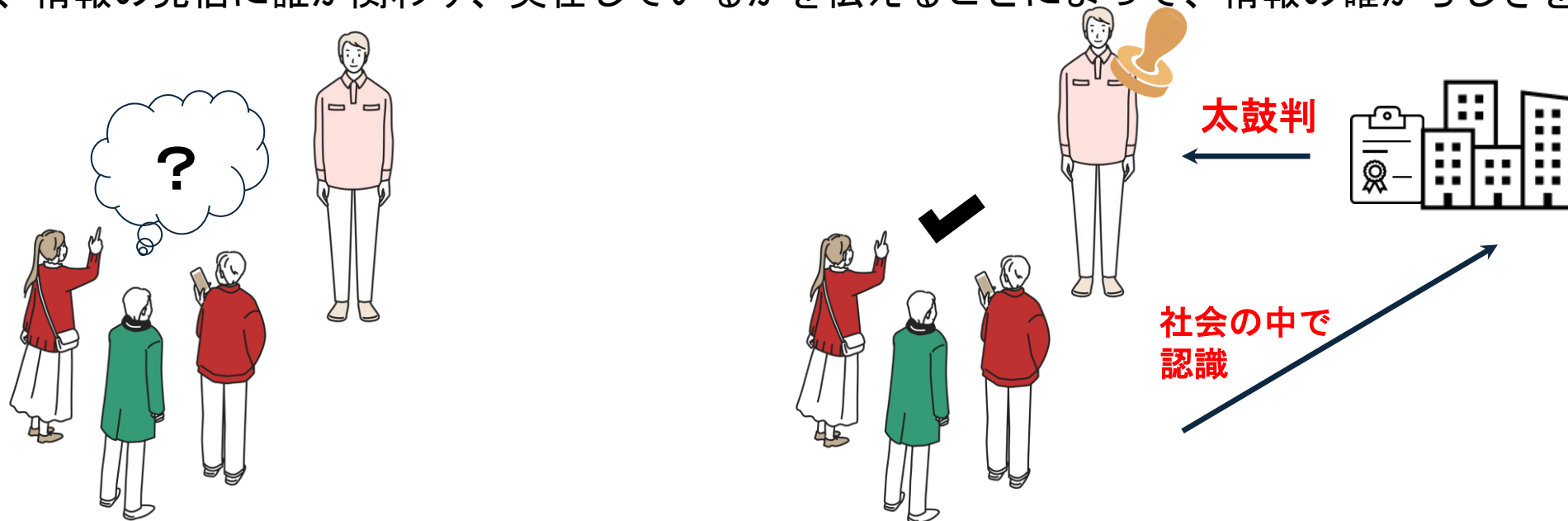
OPは、インターネット上の情報発信者を明らかに
するとともに、過去から今に至る第三者の評価を
可視化することにより直観を裏付け、信頼できる
情報が流通する社会を目指します。

「信頼できる情報社会」を目指して

人に何かを伝えるとき、自分は信頼できると示すために、第三者の評価に頼ることがあります。

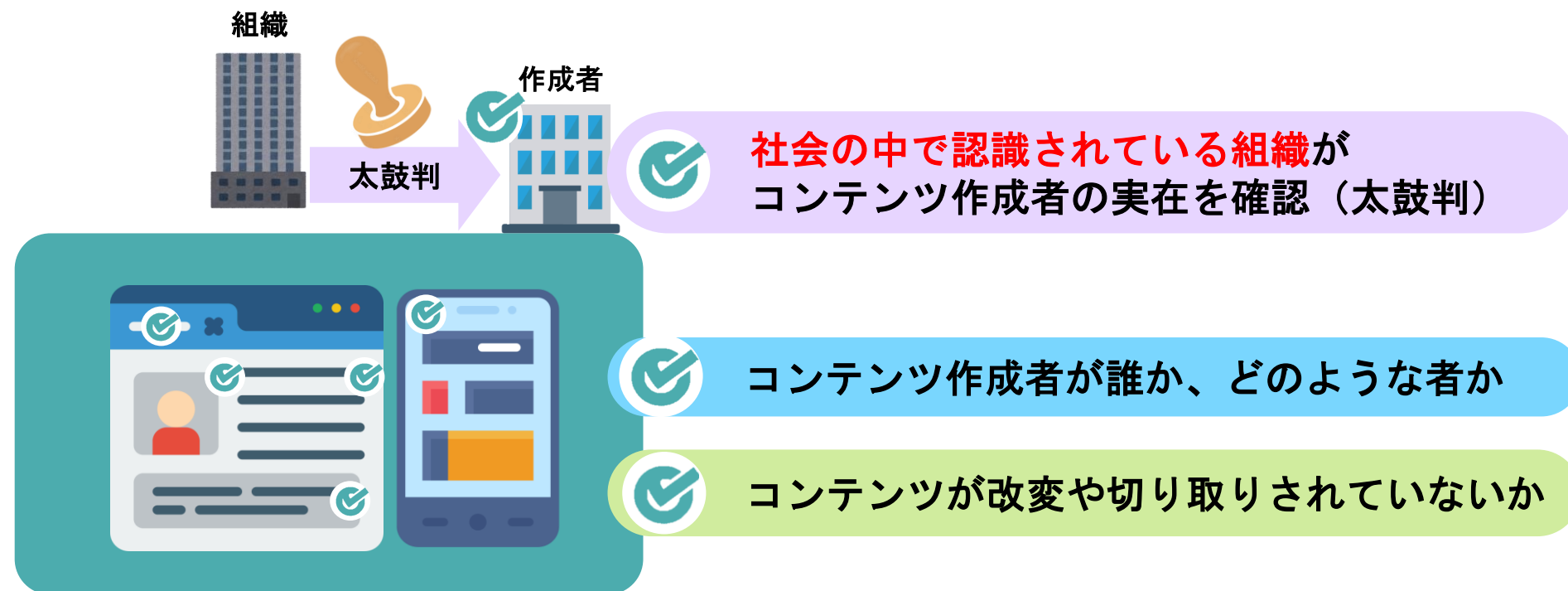
本人が「信頼してください」と言うだけでは十分ではないためです。そこで、社会の中で実績があり、多くの人に認識されてきた人や組織が「この人は本物です」と太鼓判を押すことで、信頼が得られるようになります。

OPの仕組みでは、この「**社会の中で認識されている第三者**」の役割を、情報空間で実現します。さらに、このような第三者の主体を複数、用意します。こうして、現実社会の信頼をウェブの情報に重ね、情報の発信に誰が関わり、実在しているかを伝えることによって、情報の確からしさを示します。



OPによって実現できること

現実社会では、私たちは「誰が言っているか」「その人は誰にどう認識されているか」を重視し、その内容を判断します。
OPは、これを情報空間でも実現します。



コンテンツ作成者が加盟する業界団体等、**社会の中で認識されている組織**が発信者の実在を示し、その情報を誰もが確認できるようになります。また、情報に基づく自動処理も可能になります。

OP技術の浸透により信頼が可視化・価値化される情報空間が構築されます。



偽・誤情報が
判別しやすい！

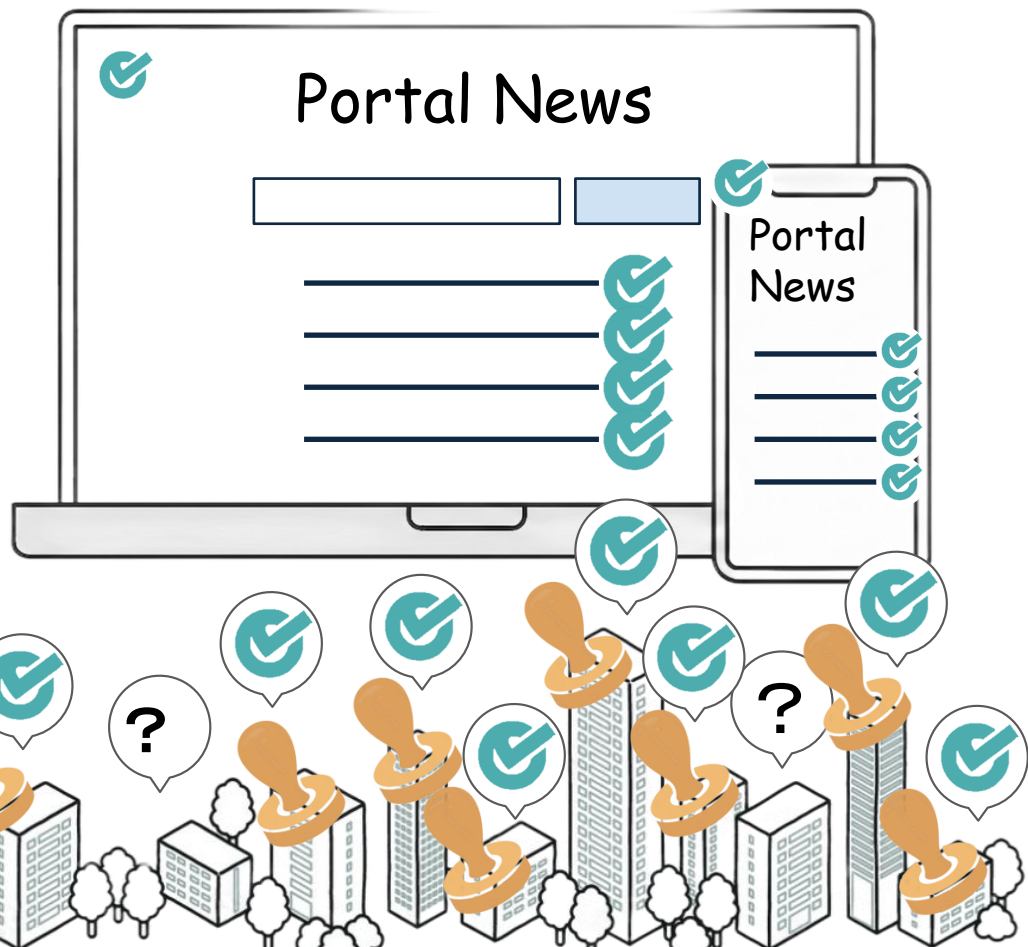


太鼓判は、届ける場所にも

「太鼓判」の仕組みは、コンテンツ作成者だけにとどまりません。

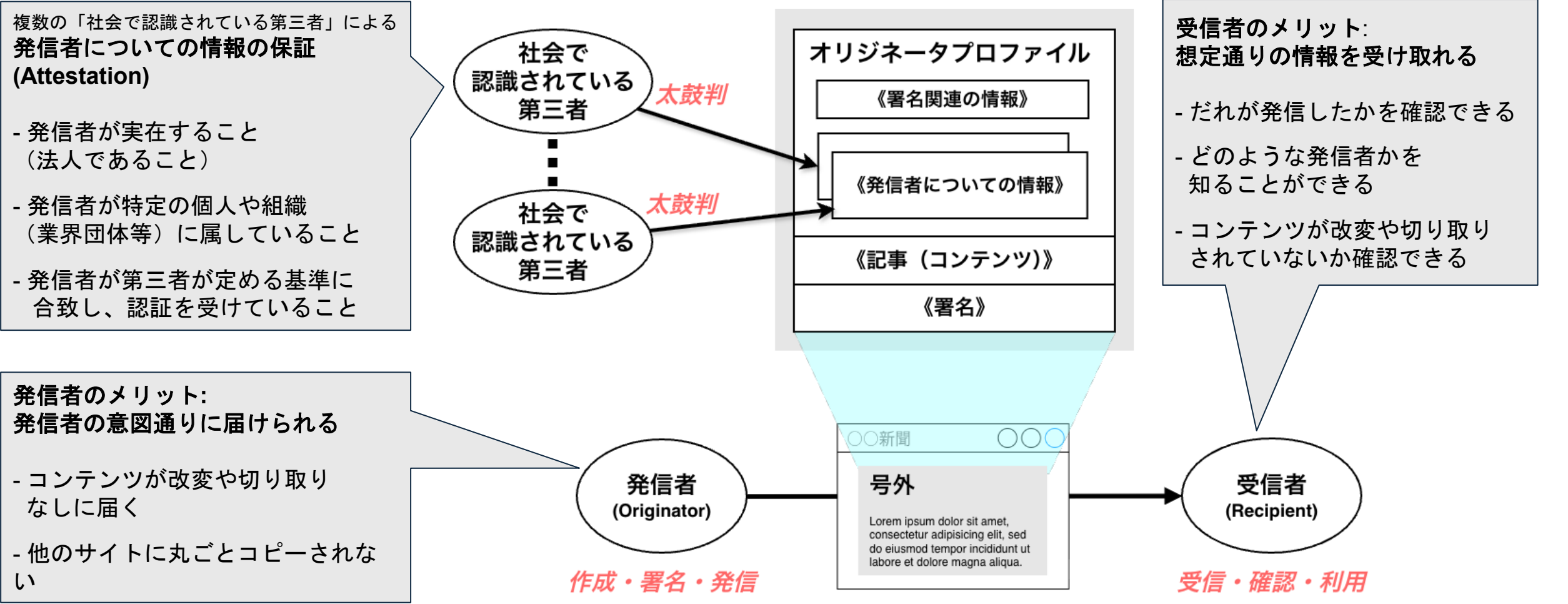
コンテンツを配信する先の、ユーザーの目に触れるサイト運営者（例：ポータルサイト、プラットフォーム）や広告事業者などもOPを導入することで、信頼性の可視化範囲が広がります。

そうして、偽・誤情報が入り込みにくいエコシステムができ、ユーザーの安全性が高まります。



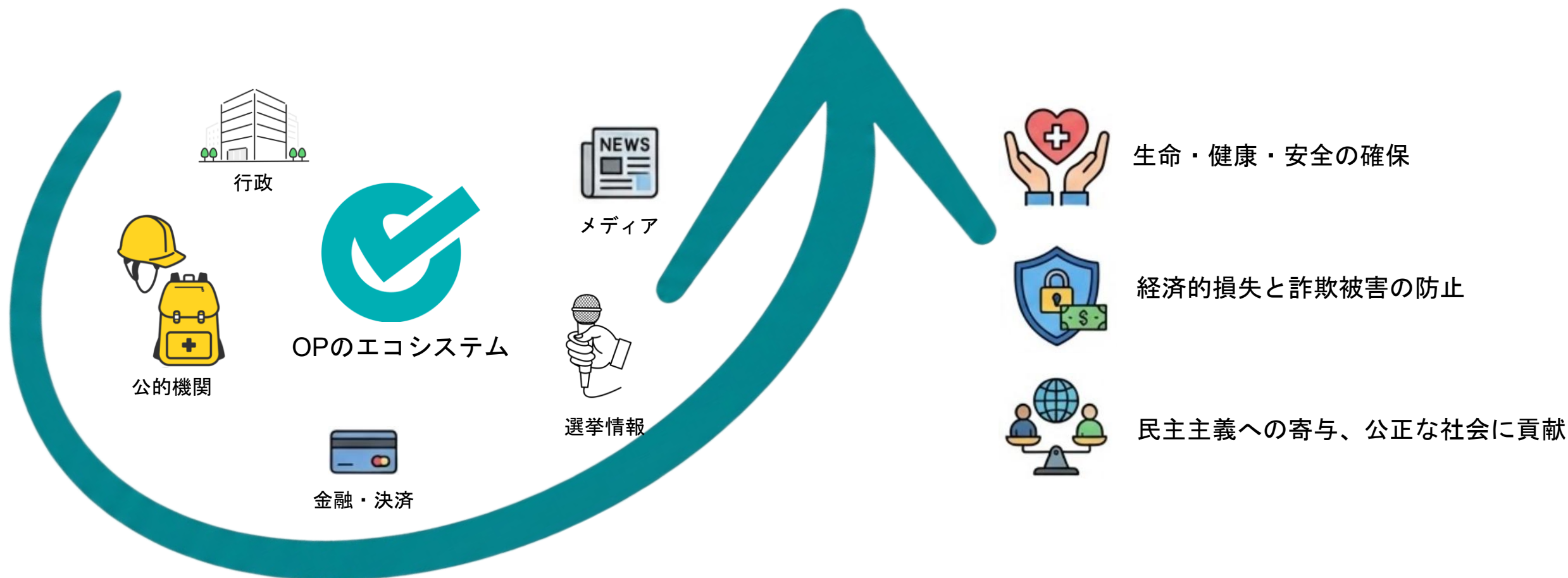
サイト運営者や広告事業者などがOPを導入

OPは受信者の健全な判断を支える



OPエコシステムの広がり和社会への貢献

情報発信者やサービスの提供者の真正性を確認・保証できるOPのエコシステムが、様々な業界に広がっていくことで、社会全体で情報の信頼性と安全性が向上します。



OPの適用領域

AIを支えるOP

人が情報やサービスに直接接する時も、エージェントが人に代わり情報の収集・分析や手続きをする時も、情報・サービスの出所と信頼性の確認は欠かせません。

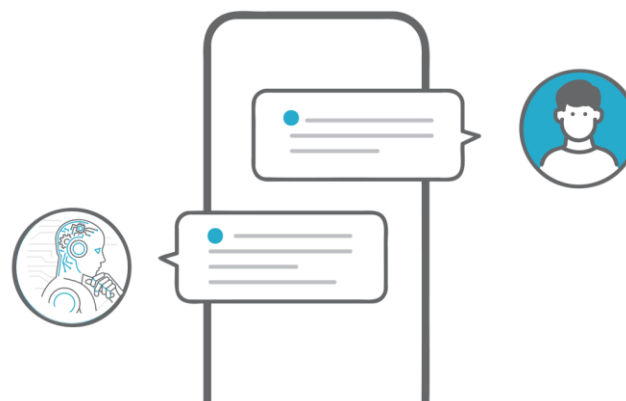
ブラウザやAIエージェントによる自動化が進むからこそ、発信者の証明やサービスの使い方を正確にAIに伝えられる技術が重要になります。

OPはウェブ技術と共に、AIによるコンテンツとサービスに対する、より正確な理解を支えます。

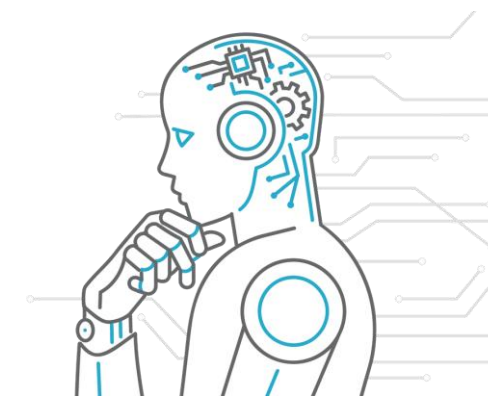
ネット情報をブラウザで調べる
(発信者の信頼性をOPで確認)



ネット情報を対話型AIで調べる
(信頼性は情報源をOPで確認)



AIエージェントが利用者に
代わり信頼性判断と処理

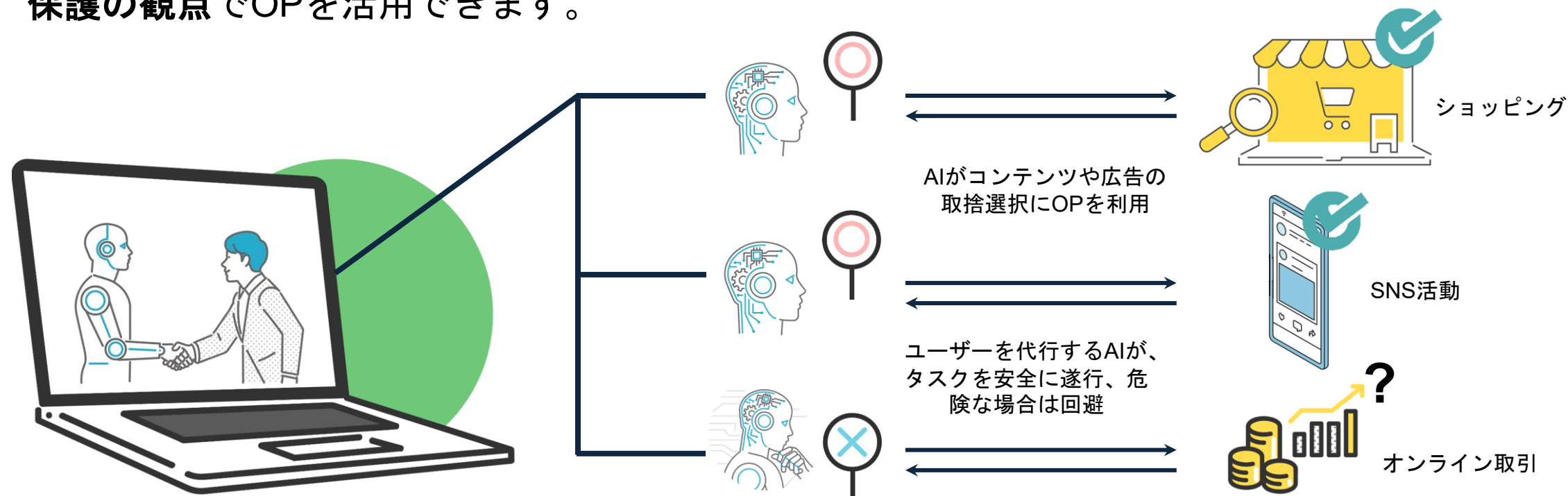


AIとOPの連携

❖ AIによる自動化

人を代行するAIが、サイトの信頼性を判断する材料は何でしょうか？

検索や投稿、決済を行うとき、サイトやサービスの信頼性を判断するために、**ユーザー保護の観点**でOPを活用できます。



メール/SMS/チャット/広告とOP (SNSは後述)

❖ メーカー・サーバ・ブラウザがOPを使い利用者を保護

現在のEメールでは「送信者が本物か」は、簡単にはわかりません。
OPによりメールの送信者情報を、確実・簡単に確認可能になります。

- ❑ リンクからページを開くときに、不審な場合は警告を表示し、フィッシング被害を減らします
- ❑ 許認可・免許・認証情報などに基づくOPを使えば、なりしはできなくなります



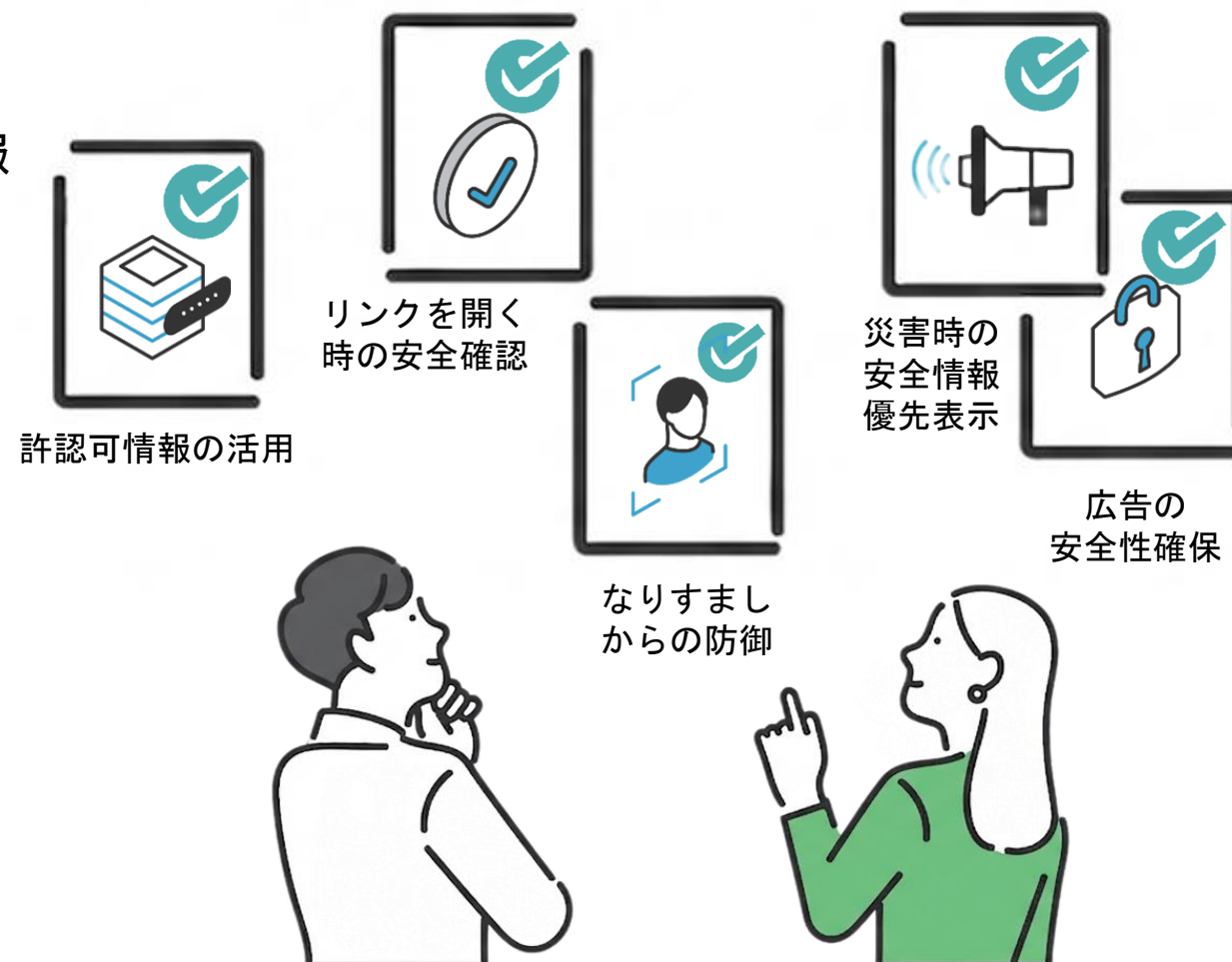
SNSとOP

❖ SNSの様々な問題解決に寄与

アカウントが本物かどうか重要な場面でも、情報源の信頼性について判断が難しいのが実態です。

SNS事業者とOPの連携により、真正性の表示にとどまらない活用が可能です。

- ☐ 許認可情報を活用した表示や推薦
- ☐ リンクを開くときの安全確認
- ☐ なりすましからの防御
- ☐ 災害時の安全情報優先表示
- ☐ 広告の安全性確保
- ☐ タイムライン改善



ネットメディアとOP



❖ 情報ソース・発信者の明確化

ネットの情報が社会に対して一定の影響力を持つなか、偽情報への接触や意図しない改ざんなどをOPにより抑制できます。

- ☐ 不確かな情報・フェイク情報等への接触
- ☐ 不法サイトなどへの広告誘導
- ☐ 詐欺的広告や闇バイト広告

- ☐ ニュースサイトや動画サイト運営者などと連携
- ☐ 他の業界団体と連携し、画像・動画の撮影・作成から表示まで一貫した安全性を目指す

ユースケース

ユースケース

目指す「OPのある社会」の例として、「生命・健康・安全の確保」「経済的損失と詐欺被害の防止」「民主主義への寄与、公正な社会に貢献」に関わる5つのユースケースを想定しました。

OPがあることにより、発信者に関する情報をユーザーが確認できるようになります。

OPが無ければ、より注意深い確認をユーザーに喚起することを意味し、結果として真偽を見分けられる可能性も高まります。

どのようなユーザーも、必要な情報に安心してアクセスでき、悪意のある情報にほだされることがないなど、情報格差がなくなる社会でもあります。

❖ 生命・健康・安全の確保

1. 第三者による発信者確認
2. 行政発の情報
3. 公的機関のサイトの真正性

❖ 経済的損失と詐欺被害の防止

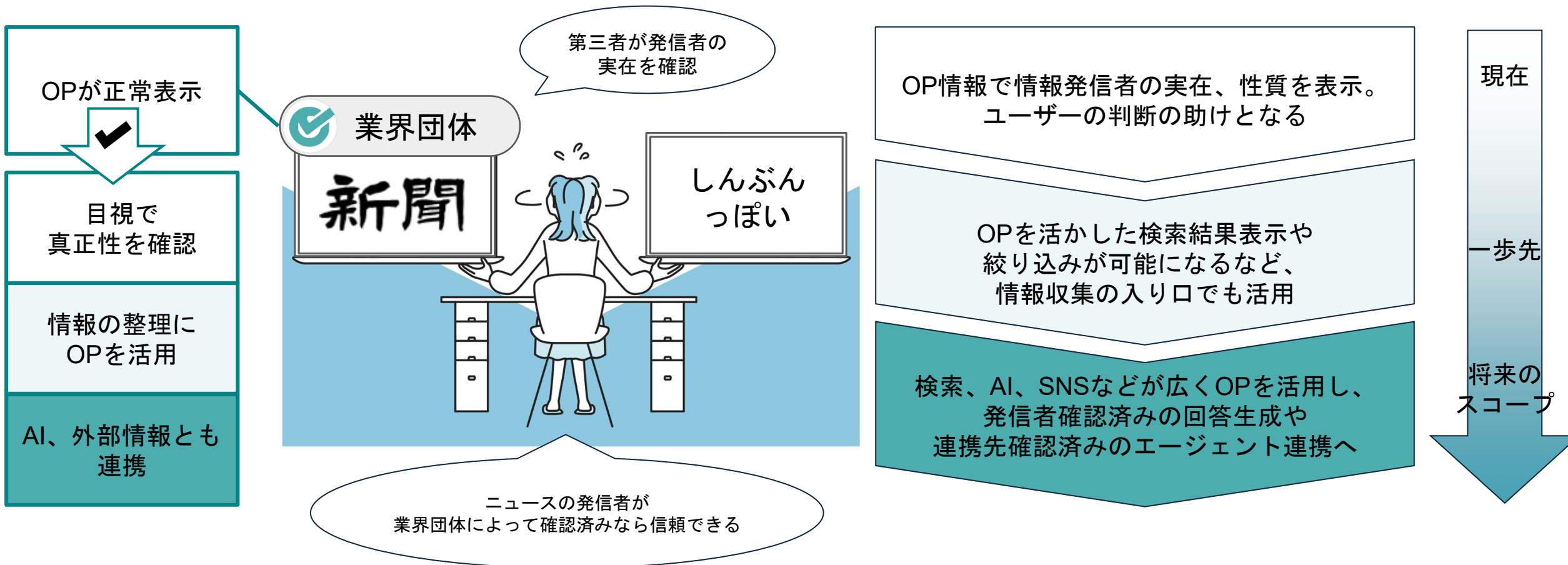
4. フィッシング詐欺対策

❖ 民主主義への寄与、公正な社会に貢献

5. 選挙に関する情報の真正性

第三者による発信者確認

報道機関を偽装したサイトが存在する中、誰が発信した情報か、責任ある団体が発信した情報なのか、業界団体などの第三者が確認したうえで付与されるOP情報が、信頼の担保になります。



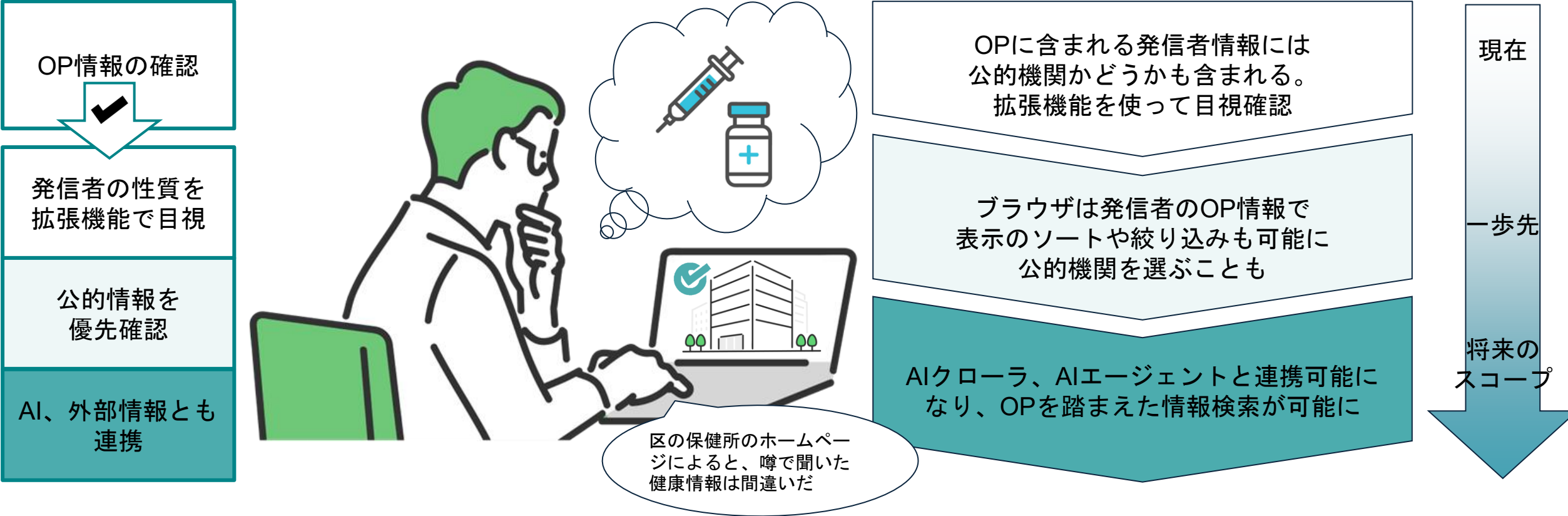
行政発の情報

災害後の生活再建支援給付制度など、犯罪ターゲットにされやすい行政情報において情報の真正性は住民にとって特に重要です。また、OPによる真正性証明が行政業務の混乱防止にもつながります。OPとは何かの広報、情報リテラシーの啓もう活動もカギとなります。



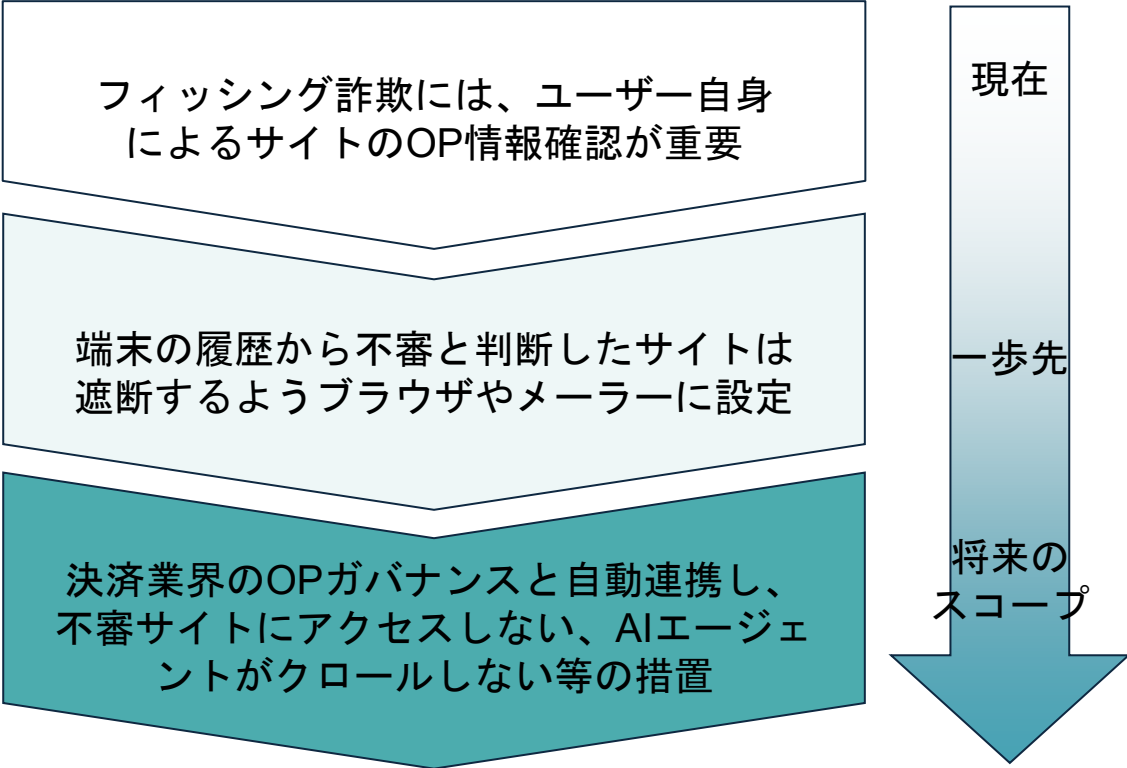
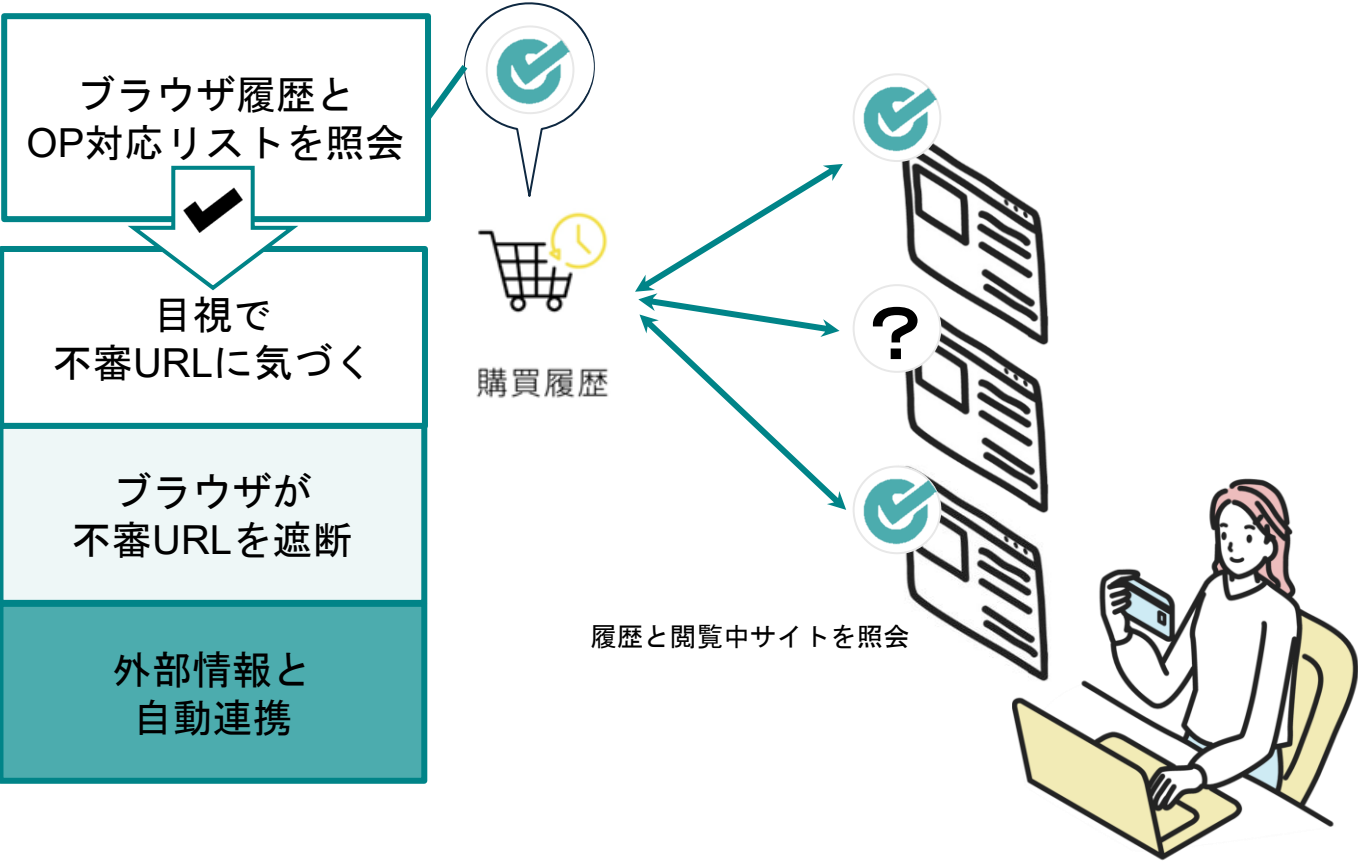
公的機関のサイトの真正性

「ヨウ素うがい薬を飲むと放射能を防げる」「あなたが捜査対象になっている」など、偽情報や公的機関をかたる偽サイトによる詐欺的行為をOPによって見分けられるようになります。保健所や警察など公的機関のサイトを本物であるとユーザーが確実にわかるのです。



フィッシング詐欺対策

OP対応ブラウザでは詐欺サイトの多い業界のOP対応企業リストに加え、ユーザのアクセスしたOP対応サイトの履歴を保持します。ブラウザとAIがOP対応のリストと履歴を参照しつつ、偽サイト・フィッシングサイトへのアクセスを自動的にブロックします。



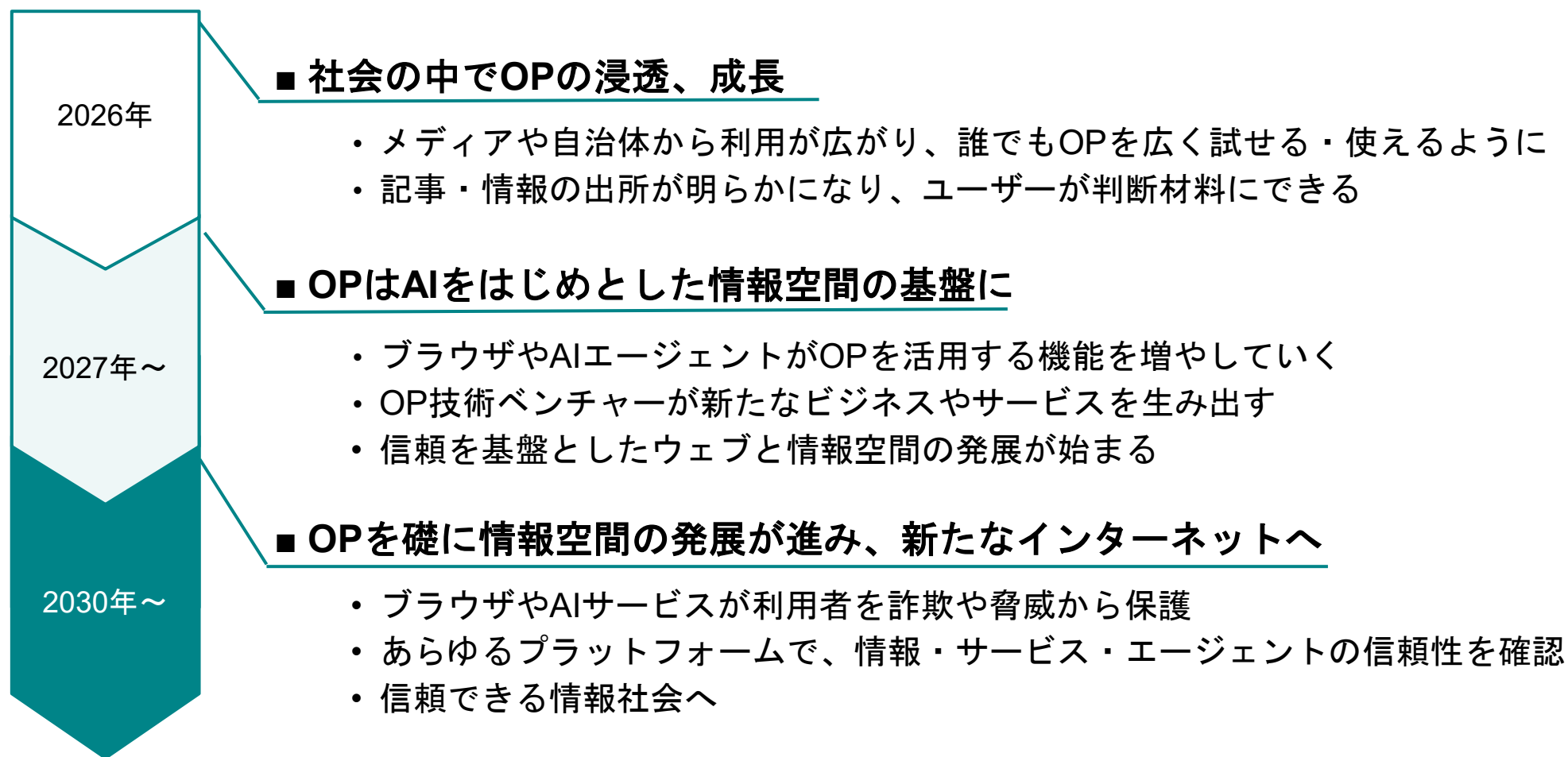
選挙に関する情報の真正性

OP本来の機能で動画素材やサイトの改ざん可能性を検知できます。また、たとえば選挙管理委員会による候補者のOP認証が行われれば、配信先やSNSなど多様なサイトでOP情報を表示でき、偽情報認知の可能性が飛躍的に高まります。



OPエコシステム浸透へ

OPによる信頼のエコシステム浸透の道のり



信頼のエコシステム浸透に向けたOP-CIPのアクション

①ユーザが試せるようになる、広がる

- ・ だれでも簡単に試せるOPへ: 拡張機能のストア登録、拡張機能同梱インストーラ配付など
- ・ OP の価値と可能性を示すデモやプロトタイプを拡張機能として提供
- ・ 未来のブラウザやAIサービスのプロトタイプを提示

②広報活動、標準化活動

- ・ OPのある世界を技術仕様とコンセプト実装例を見せつつ広報活動
- ・ ブラウザ・ウェブやAI・広告業界のコミュニティ・標準化会議に参加・提案
- ・ ウェブに信頼を取り戻すオープンな技術コミュニティとして技術開発と啓蒙活動

③OPが広く活用される

- ・ ブラウザやAIサービスがコンテンツやサービス提供元を自動的に確認し利用者を守る
- ・ AI、SNS、広告取引、検索などのプラットフォームが広くコンテンツの出所、サービスやエージェントの提供元をOPで確認し、信頼できる情報社会を実現